

謄写版印刷～ガリ版に魅せられて～

阪野 知春

【目次】

はじめに

第1章 謄写版の概要

第1節 謄写版の起源

第2節 謄写版の誕生

第2章 謄写版器材について

第3章 謄写版の最盛期

第1節 民間に普及するまで

第2節 山形県南陽市の謄写版印刷の名人「鈴木藤吉」

第3節 学校教育と謄写版

第4章 謄写版の現代

第1節 今も生きつづける謄写版

第2節 謄写版の魅力を活かして

おわりに

後藤さんから頂いた以外の資料

参考文献

参考サイト

後藤さんから頂いた資料

謝辞

はじめに

私は今回「^{ようしやばんいんきつ}謄写版印刷」というテーマについて研究しようと考えた。私がこのテーマを取り上げた理由は、印刷会社に内定をいただき、印刷の歴史について興味を持ったからだ。印刷の歴史といっても、分野は限りなく広い。1963（昭和38）年を舞台とした、とある映画に登場する簡易印刷機「ガリ版」¹に私は注目した。

私は以前からガリ版という言葉は知っていたが、見たことも、使ったこともなかった。以前の私のように、謄写版をまったく知らない人は多いだろう。ここで謄写版について簡単に説明しておく。謄写版とは「孔版印刷の一種。蠟引きの原紙を鑊（やすり）板にあてがい、これに鉄筆で文字や絵を書いて蠟を落とし、その部分から印刷インクをにじみ出させ印刷する。」（広辞苑 第六版）、いわゆる製版から印刷まですべて手工的に行う印刷機である。なお、ここに登場する「孔版」というのは「画線部に印刷インクを浸透させるようになっている印刷版。」（広辞苑第六版）である。

本論文では、謄写版の誕生から現在までの歴史と、その使われ方をまとめたい。その際に、謄写版を使ったことがない世代にも、分かりやすく理解できるように説明したい。明治から昭和にかけて、国民的印刷機械であった謄写版を、日本の印刷の歴史の1つとして理解したいからである。

調査方法としては、ガリ版文化を研究されている志村章子さんが著した文献をはじめ、印刷・製版業界の歴史に関する文献、謄写版について記載されているウェブサイトを用いる。また、今回の卒業論文を書く上で大変お世話になった、中央印刷株式会社内の山形謄写印刷資料館館長後藤卓也さんから頂いた貴重な資料を用いて調査をしていく。

第1章では、謄写版の概要について説明する。簡易印刷機である謄写版の起源と誕生した背景、発明者が謄写版を販売するまでの経緯を明らかにしていきたい。

第2章では、謄写版を使用するにあたり、どのような器材を使うのか、器材の種類について紹介していく。

第3章では、どのように民間へ普及していった日本の国民的印刷機となったのかを探っていく。さらに、最盛期の山形県における謄写版の活躍や教育現場での謄写版の在り方を

¹ 「謄写版の俗称。堀井新治郎父子発明（一八九四年）による簡易印刷機を多くの日本人はガリ版と呼んで親しんだ。鉄筆で原紙を切る（書くこと）音の「ガリガリ…」からいつの間にか名づけられたものであろう。また、ガリ版の語は、謄写版そのものを指すと同時に、謄写印刷をも表わし、さらに「ガリ」と縮めたり、「ガリ版をやる」のように使われた。」（志村章子『ガリ版文化を歩く—謄写版の百年』の「ガリ版用語集」pp.298-299 引用）

みていく。また、謄写版の歴史を年表にしてまとめていく。

第4章では、謄写版の現代について明らかにしていく。現代日本の謄写版事情についてまとめる。また、海外にも視野を広げ、今どのように活躍しているのかにも触れていきたい。

なお、以下で〔 〕内は全て筆者による。引用部分の段落、二重引用符は引用文と同じにする。

第1章 謄写版の概要

第1節 謄写版の起源

日本で謄写版が誕生する前は、どのような簡易印刷方法があったのかをみていく。以下、科学技術史コレクションの「謄写版（簡易印刷機）」というウェブサイトから引用する。

同一の文書を数部ないし数百部でいど作りたいという要求は古くからあったと思われます。例えば戦国時代の武将は“祐筆”という書記役を身近に置いていました。軍務・政務に関わる書類の作成が主な職務だったが、その中には同一の文書を複数書くという仕事が相当あった筈です。近代になっては、政治組織や教育制度が整備されるに従い大量の同一文書を扱う必要が急増しました。

ところが、既に発明・実用化されていた印刷技法は数百部、数千部の処理には活用出来ましたが、数部ないし数十部の処理には適していませんでした。結局は“手書き”するしかないのですが、この仕事は大変に厄介な上に誤記を伴います。近代組織において文書による指示・伝達は日常に発生しますが、これは誤記があれば一大事です。

それですから“簡易印刷機”と云うべき機能を持つツールへの潜在的な要求は高まりつつあったと思われます。1800年代末期に“蒟蒻版”²と称する簡便印字器が市販され学校などで使用されましたが広くは普及するに至らなかったようです。

²（もと蒟蒻を用いたという）平版印刷の一種。ゼラチンとグリセリンを平皿に流し込んでゼリー状に固めたものに、塩基性染料で書いた原稿を回転して版を作り、これに湿り気を与えた紙を押し当てて印刷する。（広辞苑 第六版）

上記の引用文をもう一度整理する。数百枚程度の同一文書を印刷機で印刷するには大掛かりな態勢が必要になる。それに対し、手書きするとなると大変厄介な作業になる。このため昔から簡易印刷機に対する欲求はあったとされる。

なお、ここには書かれていないが、すでに発明・実用化されていた印刷技法とは、木版や石版印刷、活版³印刷等のことだと思われる。特に活版印刷は、日本のような漢字文化圏において、活字の数が膨大で、欧米より大掛かりな態勢と費用を必要とした。そのため、簡易印刷に適していなかった。また、明治時代の簡易印刷機としては、蒟蒻版があったが多くて 20 枚程度の印刷が限界だった。企業や役所、学校はより多くの同文書類を必要とし、質の高い簡易印刷機は様々な活動において強く求められた。

第 2 節 謄写版の誕生

次に、日本の文字事情に適合し、簡易印刷機として十分な機能を持った“謄写版”は誰が発明し、どこでどのように使われたのか、誕生とその歴史についてみていく。

謄写版は、1894（明治 27）年、滋賀県の堀井新治郎父子（元紀、仁紀）により開発、販売された。ではなぜ、堀井新治郎父子が簡易印刷機を発明したのだろうか。その発明の発端についてみていく。以下は、近江歴史回廊倶楽部の「ガリ版の発明者堀井新治郎父子」というウェブサイトからの引用である。

初代新治郎元紀は安政 3(1856)年に駕輿丁村（元、竜王町）の菱田家に生まれ、のちに堀井家を相続しました。

明治 12(1879)年に滋賀県紅茶取締所に入り、官吏としての道を歩み始めました。さらに、滋賀県勸業員、農商務省乙部巡回教師にも任命されて、製茶や養蚕などの改良事業に従事しています。

官吏としての生活を送る中で、元紀は文書事務処理の煩雑さを体験し、簡便な処理方法の必要性を強く認識するようになりました。

当時日本においては「コンニャク版」などの複写法が用いられていましたが、いずれも文書の大量印刷には向かず、かつ印刷には熟練を要するものもありました。

そこで、元紀は官吏を辞し、養子の仁紀〔2 代目新治郎〕とともに実用的な簡易印刷方法の発明に専念することになりました。

³ 活字を組み並べてつくった印刷用の版。(広辞苑 第六版)、凸版印刷の 1 種。

初代 堀井新治郎（元紀）
（1856-1932）



4

2代目 新治郎（仁紀）
（1875-1962）



5

1893（明治26）年、堀井新治郎父子は職を退き、簡易印刷機の発明に精進した。次は、謄写版の発明と開発、販売までの経緯をみていく。以下は、科学技術史コレクションの「謄写版（簡易印刷機）」というウェブサイトからの引用である。

堀井父子が発明に着手してから、発明までは1年余とされていますから、比較的短期間であったように見えますが、この間の苦心が大変なものであったと想像されます。安定した職を捨てて未知の分野に挑戦するのですから、その決意は驚くべきものが有ります。1893年に父の元紀は海外状況の調査のためにシカゴ万国博を視察に赴きましたが、その費用は借金に依りました。さらに研究を遂行するために先祖の伝来の不動産を処分して資金を作り、仏壇を菩提寺に預けて上京するという有様で正に背水の陣を敷いたのでした。

上記の引用文をもう一度整理する。1893（明治26）年3月にシカゴの万国博視察を兼ねて印刷技術の先進国であるアメリカに簡易印刷方法の情報収集、技術習得に出向いたということである。つまり、謄写版のルーツは欧米の簡易印刷の発展史に連なるものである。以下は、志村章子の『ガリ版ものがたり』（pp. ii - iii）からの引用である。

⁴ 出典：horii「発明家 堀井新治郎」、
<http://members.e-omi.ne.jp/okamoto/yumepuran/gariban/sinji/horii.htm> 2013-12-17

⁵ 出典：horii「発明家 堀井新治郎」、
<http://members.e-omi.ne.jp/okamoto/yumepuran/gariban/sinji/horii.htm> 2013-12-17

エジソンズミメオグラフ



6

特に堀井新治郎が“師”と仰いだのが、アメリカの（あるいは世界の）大発明家トーマス・アルバ・エジソン発明の簡易印刷機“エジソンズミメオグラフ”であった。もともと、わが国伝統の染物（捺染法⁷）などをヒントに製品化に取り組んでいた堀井親子の研究は、性能のみならず外見も西欧風というエジソン型として完成した。エジソンを一〇〇%模倣したとする考え方も根強く存在しつづけたが、私には与しない。堀井の努力は、確かに充分とはいえなかったかもしれないが、最初から日本文—漢字かなまじりの文印刷を可能にするさまざまな工夫に彩られていたのである。

当初は、原紙（強靱で極薄のガンピ紙の採用）、ヤスリ（研磨用工業ヤスリの転用）が知られるが、原紙ロウ引き機なども堀井の発明とされる。確かに大正初期までを原始時代と呼ぶ謄写技術者もいるが、大正末から戦前昭和期には、基本的技術が確立している。ガリ版の愛称を生んだ大正デモクラシー期に、民間のユーザーを急増させたことが引き金となり、戦前昭和の時代には、謄写器材、技術が発展する。日本の謄写印刷発展史は、極めて特殊である。堀井父子が、日本の近代化を担う目的で開発した簡易印刷器は、やがて美しい多色刷りを生み出し、戦後（一九五〇年代）には技術・器材発展は最高レベルに達し、なお器材の改良、細やかにして強靱な工夫の歴史は斜陽期に至るまで継続する。

上記の引用文を筆者の言葉で説明と補足すると、アメリカのトーマス・エジソンなどの

⁶ 出典：クイン・エマニュエル法律事務所の「ミニ・エジソン・ミュージアム」
http://www.quinnjapan.com/imini_edison_museum/index.html 2013-12-27

⁷ 色糊で布地に文様を印刷する染色法。（広辞苑 第六版）

簡易印刷機をヒントに謄写版を発明と開発、販売したということである。1894（明治 27）年には、東京市神田区鍛冶町大通 3 番地に謄写堂を開業した。翌年の 3 月 12 日に堀井謄写版は特許を取得（第 2499 号）する。

堀井謄写版



8



9

堀井新治郎は、最新印刷機を次のようにアピールしている。以下は、志村章子の『ガリ版文化を歩く―謄写版の百年』（pp.8-9）からの引用である。

「事物の進歩と共に繁を省きて簡に就き、不便を捨てて便に向かい、新奇なる器械日を逐うて増加し、一般世人を利する極めて大ならんとす」（謄写堂「謄写版解説」一八九七年）

同社のこの商品カタログで堀井は、今までもさまざまな改良機械の発明はあったが、価格が高すぎたり、印刷時間がかかりすぎたりで、実用にあうものがなかったのだと述べる。

そこで「(われわれ父子は) 東西の新器を参酌し普く経験に訴え、今回始めて円満なる複写器を發明せり。その価廉にして、その器強く、その法簡にして、その術易く時を節し手数を省き婦女子といえども一時間に千枚以上を印刷得べし。而もその文字鮮明にして通常の活版に優ること数等なり。けだし、古今独歩東洋の一大發明

8 出典：山形県印刷工業組合公式サイト「業界トピックス：山形謄写印刷資料館」
<http://yamagata-pia.jp/topics/mimeograph/> 2013-12-18

9 中央印刷株式会社内の山形謄写印刷資料館に保存されている堀井謄写版 筆者撮影

至要の複写器というも敢て過言にあらざるべし」とする。

安い、丈夫、操作が簡単で誰でも刷れる、性能がいい、便利である、仕上がりが美しい、というわけである。外国の印刷機もじゅうぶんに研究した、とも言っている。〔中略〕

百年前、堀井新治郎が掲げたように技術の発展は、とどまることを知らない。手ごろな価格、丈夫、性能がよくて、便利、使い勝手がいい。ワープロなどの新しい印刷機だけでなく、こうした“文明の利器”が家庭内にあふれている。

ここまで、謄写版の発明から販売までの歴史を紹介した。次は、謄写版が初めどこでどのように使われていたのかみていく。志村章子の『ガリ版ものがたり』(p. ii)によれば、「謄写版は、日清戦争開戦の年（一八九四年）に最新の国産事務用印刷機として世に出た。〔中略〕謄写版の初の大舞台は、大陸の戦場であった。陸軍御用の軍事通信に採用されたからである。〔中略〕国内では、戦後の一九六〇年代までが謄写版の最盛期であった。全国の役所などの公的機関の事務用印刷器の主役として、また教育現場、政治、社会運動、文芸芸術の分野、硬軟に及ぶアンダーグラウンドでの活躍も世に知られる。」とある。初め謄写版は、官公庁や軍隊、教育現場など“官”の分野に業績を伸ばしていったとされる。社会運動の機関紙やリーフレット、ビラ、非合法下の政党機関紙を作るなど、謄写版は大活躍した。

第2章 謄写版器材について

謄写版を使用するにあたり、どのような器材を使うのか、器材の種類について作業の流れを踏まえながら紹介していく。まず謄写版印刷の原理について説明する。以下は、科学技術史コレクションの「謄写版（簡易印刷機）」というウェブサイトからの引用である。

薄紙にパラフィン・樹脂・ワセリンなどを塗り乾燥させた原紙（ロウ紙）を専用のヤスリの上に載せ、鉄筆という先端が鉄でできたペンで文字や絵を描くと、ロウが削られて微細な孔が無数にできて「透かし」になる。このようになった原紙の下に白紙を置き、上にインクを塗りローラーで圧力をかけると「透かし」の部分だけインクが通り抜けて白紙に文字や絵が印刷されます。これが“謄写版”の原理です。

以下は、志村章子の『ガリ版文化を歩く―謄写版の百年』の「ガリ版用語集」と志村章子の『ガリ版ものがたり』「謄写器材の発展史」からの引用である。

なお、志村章子の『ガリ版文化を歩く―謄写版の百年』「ガリ版用語集」をA、志村章子の『ガリ版ものがたり』「謄写器材の発展史」をBと表記して引用する。

本章で用いる写真は、脚注番号がついている写真以外、筆者が撮影したものである。筆者撮影の謄写版器材は、全て中央印刷株式会社内の山形謄写印刷資料館館長後藤卓也さんからお貸し頂いたものである。

謄写版器材一式



10

ロウ原紙

雁皮紙¹¹（和紙）に用途に合わせた各種の罫をプリントして、松やにその他を混ぜたパ

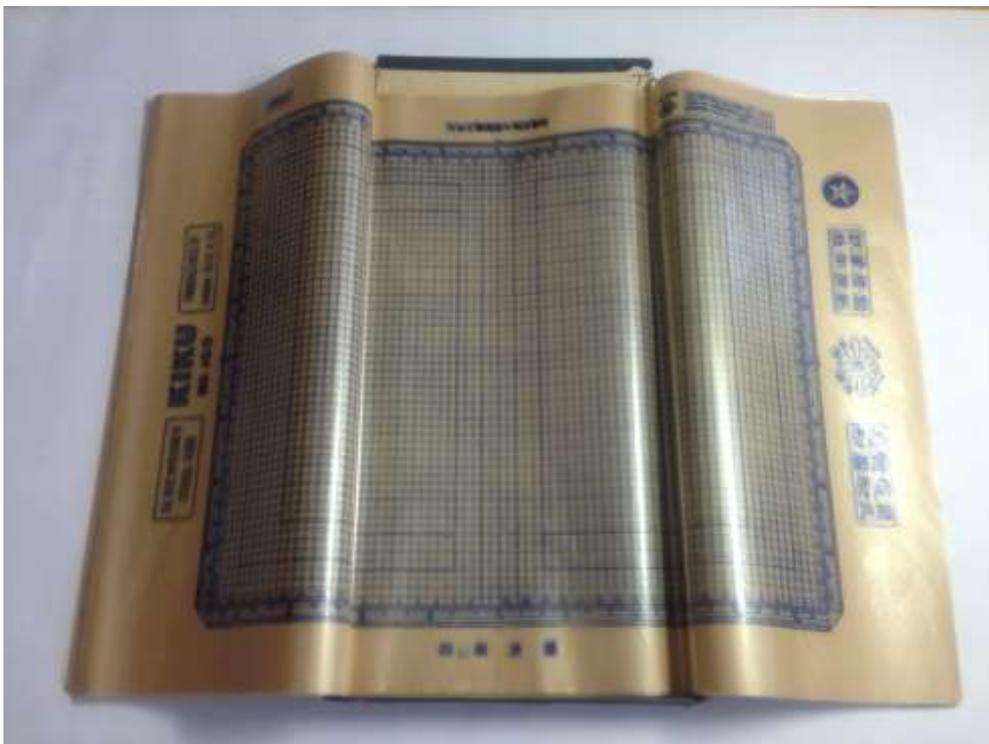
¹⁰ 出典：楽天ブログ「チューさんの今昔ばなし：謄写版・・・昔の手書きプリンター（2）」

<http://plaza.rakuten.co.jp/chusan55/diary/201107200000/> 2013-12-18

¹¹ ガンピの樹皮の繊維を原料とし、ノリウツギの内皮の液、またはトロロアオイの粘膜を用いて漉（す）いた、紙面が滑らかで上品な和紙。（広辞苑 第六版）

ラフィン¹²紙を表面、裏面に塗装する（無地罫は美術孔版用）。原紙罫の代表は、プリント罫（原稿用紙のような罫）と方眼罫で、それぞれタテ書き、ヨコ書き用、さらにマス目の大きさによって、方眼罫は各五、四、三ミリ、プリント罫はA（中字）B（細字）C（極細字）などがある。原紙サイズは、A4判が標準だが、小ははがきサイズから、大はA3判、新聞判サイズもあった。特殊罫には世界、日本白地図や五線譜などもあった。〔A p.301から引用〕

プリント罫（原稿用紙のような罫 タテ書き、ヨコ書き用）



¹² 狭義には、パラフィン蠟、すなわち石蠟（せきろう）を指す。高級なパラフィン炭化水素の混合物で、常温では白色半透明蠟状の固体。重油から分離精製され、天然には地蠟（じろう）として産する。蠟燭（ろうそく）の原料、軟膏の基礎剤などにする。（広辞苑 第六版）

五線譜の原紙



海軍 (軍事用原紙)



鉄筆

製版の基本的器材。ヤスリ版の上にロウ原紙をおき、鉄筆で両面のロウを削りとることで製版が完成する。ロウの削りとられた部分にインクを浸透させ印刷する仕組み。毛筆謄写版が化学的に印刷の孔をつくる方法であるのに対して、鉄筆謄写版は物理的方法。最初の鉄筆は、木製ペン軸の先に鋼の針先を差し込んだ形のもの一種だったが、後に需要の拡大により、その目的に応じた多種の鉄筆が開発された。その数、数十種に及ぶ。たとえば、丸先（文字、絵画細部用）、扁平型（ツブシ、太文字用）玉先、バチ型、ナギ刀型、ヘラ型、実用線、点線用、テーパレス、ナイフ型（ツブシ用）コマ型（ツブシ用）円描用などがある。形としては、魚雷型（短形）や両頭がある。ガリ版及び周辺器材の製造が中止されている中、須坂製作所は現役〔1995年当時〕である。用途が謄写印刷だけでなく、陶芸、銅版（エッチング）などの作業に鉄筆が使用されているからである。軸はろくろを挽いてつくった木製軸から、エボナイトへ移り、現在はプラスチックの成型品である。〔A p.301から引用〕

謄写版用鉄筆セット ヤスリ版の上に原紙をおき、鉄筆でロウを削りとる



数十種の鉄筆



謄写版ヤスリ（鏝）

謄写版の原紙を切るための下敷き。鋼質の板にタガネで目を刻む（溝をつくる）。堀井新治郎が、工業用ヤスリをヒントに開発した。初期は、印刷台の片隅に三センチほどの幅のヤスリが埋めこまれていてヤスリ版として独立して^{マツ}いなかった。溝の間隔の大小で、A面、B面、C面、絵画目、アート目に分かれ、また刻み角度により、X目（斜）、方眼など。使用目的一太字や細字、ツブシ、線引、書体、美術などに合わせて使い分けた。

ヤスリは現在〔1995年当時〕、在庫のみだが、A面が少ないようだ。紙ヤスリ、ガラスなどの代用も考えられる。ボールペン原紙ならヤスリは不要。プラスチック素材のスクリーンシートもある。〔A p.300から引用〕

謄写版ヤスリ



ローラー（ルーラーともいう）

謄写印刷するための円筒形の器具で堀井新治郎の発明。同社ではルーラー棒と呼び、最初の商品の素材は膠製（ゼラチン）。ゴム製のローラーの発売は一八九九年である。よいローラーとは、面が平滑で弾力性のあるもの。ゼラチン製は夏は溶けやすく、冬は固くなりやすいので、夏用、冬用が必要。ゴム製は保存がきくため、一般にはゴム製が普及したが、現在でも美術孔版家にはゼラチン製を使用する人がいるが自家製。ゴム製は使用后、インクをふきとって保存するが、ゼラチン製はインクをふきとらず、そのままにしておく。中国では、現在〔1995年当時〕でもゼラチンローラーの製造が行われている。〔2013年現在も製造されているかは不明〕〔A p.300 から引用〕

ゴム製ローラー



謄写版用インク

他の印刷インクに極めて近いもので、速乾性。インク盤（練盤）の上でインクヘラ（パレット型、角型）で練ってそのまま使用。現在、同インクは市販されていないので、平版用インクを灯油などで溶いて使用する人も多い。なお練盤は、厚目のガラスや金属板で代用できる。大き目の方が作業もやりやすい。[A p.302 から引用]



堀井謄写堂のインク



輪転謄写機インキ

スクリーン

原紙を保護する目的で謄写印刷器の上枠に張られた絹布のことである。戦後には、枠つきスクリーンも市販された。

戦後の謄写版使用者の多くは、明治大正期末までスクリーンなるものが存在せず、直刷り（原紙に直接インクをつけて印刷）だったことを知らない。平版インクなどに比べても、粘っこい謄写用インクの上で直接ローラーが回転するのだから、作業中に原紙が破れやすかったことは、たしかである。〔B pp.48-49 から引用〕

枠つきスクリーン



インクベラ

インク缶からインクを適量取り出し、混色などに使う。謄写版一式に含まれる付属品のひとつ。古くはねりまわ捻廻しと呼ばれた。〔B p.52 から引用〕



修正液

製版し損じた文字などを修正する道具である。〔中略〕修正液の役割は、文字や絵の修正だけではない。大量印刷（三千枚以上をいう）の際には、原紙補強を目的に使用することも多かった。エアコンの普及していなかった時代、特に猛暑の夏には、原紙のロウが溶けだして印刷物に黒い点々（インク洩れが原因）が現れた。事前に原紙の裏に修正液を塗布して予防策とした。〔中略〕

修正液には用途別にロウ原紙用液はオレンジ色、タイプ原紙用（主原料はコロジオン）は、青色であった。〔B pp.50-52 から引用〕



13

コテ（鏝）

原紙を枠に張ることのほか、誤字、脱字の訂正などの原紙の切り貼り作業にも用いる。実務家をターゲットに「孔版電器鏝」（一九五〇年）が昭和謄写堂から発売された。それ以前は、和裁用のへらごてなどが使用された。〔B p.52 から引用〕

オイルストーン

鉄筆先の調整作業に用いる油砥石。安価な国産の石もあったが、孔版技法書では米、独からの輸入品を推奨している。「鉄筆が砥げたら一丁前」といわれた時代があった。石に小穴を開けた鉄筆砥ぎ器も市販されていた。〔B p.52 から引用〕

製版、美術用定規

○、△、☆型、楕円、曲線、波型、その他種々の書体のアルファベット、洋数字などは

13 出典：いいものみつけた「謄写版の鉄筆原紙用修正液」
<http://kosamabetuka.cocolog-nifty.com/iimono/2008/11/post-2812.html> 2013-12-18

製版作業を容易にした。草間、千田の創案による一九五二年発売の「ユニオン定規」（昭和
膳写堂）は数十年に及ぶロングベストセラー商品となった。〔B p.53 から引用〕

ワイヤーブラシ

ヤスリの溝にたまるロウの滓を掃除するための道具。小判型と、ブラシが左右についた
歯ブラシ状があった。〔B p.53 から引用〕

紙受け箱

早刷り印刷器の左隣り（右利きの場合）に傾斜ある凹み（箱状、ベニアなどで自製）に
刷り上がった印刷物を落とす仕かけである。〔B p.53 から引用〕

あいし 間紙

インクの裏うつりを防ぐために一枚一枚印刷物にはさむ用紙。使い込んだ古新聞などが
多かった。四隅の一片に斜めに切り落としておくのもアイデアである。間紙のみふるい落
とすことができる。〔B p.53 から引用〕

安全カミソリの刃

原紙裏の紙ほこりを除去するのに用いる。カミソリを髭そり時のように使う。草間京平
はコンニャク片を、佐藤勝英はタバコの煙を利用するなど、それぞれある。〔B p.54 から
引用〕

灯油用小鉢

インク溶剤入れ。好みの空き瓶のリユース。〔B p.54 から引用〕

製版、美術用定規と安全カミソリ刃に登場する草間京平、千田規之、佐藤勝英について
説明する。

草間京平（くさま・きょうへい）

1902-1971（明治 35 年・昭和 46 年）、茨城県生まれ、本名佐川義高。大正中期に上
京、郵便配達、人夫、出版社の校正係などをしながら、文学を志す。1920 年（大
正 9 年）に短歌の同人誌『孔雀草』を膳写印刷で創刊。1923 年、作家有島武郎か
ら資金を得て、芸術倶楽部アパートの一室で「黒船社」を設立、膳写印刷技術の研
究と出版に取り組む。

膳写印刷の技法開発、機材開発、研究誌の発行、教育・普及活動に尽くし、膳写印

刷技術の第一人者といわれた。¹⁴

千田規之（せんだ・のりゆき）

1902-1976（明治 35 年-昭和 51 年）。本名田畔孝。詩人。謄写印刷の世界では理論家として知られ、1951 年に書き下ろした『謄写印刷技術教本・印刷篇』（昭和謄写堂）は、共編の『謄写印刷初等教本・製版篇』とともに 20 年にわたるロングセラーとなる。ハンドメイドの NS 鉄筆を開発し、全国の技術者から珍重された。¹⁵

佐藤勝英〔さとうかつえい〕

1965 年熊本県生まれ。熊本に「黒船工房」を構え、謄写印刷技術を現代に伝える。浮世絵の復刻工芸品を多く制作している。¹⁶

第 3 章 謄写版の最盛期

第 1 節 民間に普及するまで

次に、謄写版が民間に普及するまでの背景を説明していく。以下は、植野比佐見の『謄写版の冒険—卓上印刷器からはじまったアート』（p.9）から引用する。

謄写版が身近な印刷術としてより親しまれるようになったのは、佐藤兄弟^{けいてい}商会など、個人層を顧客にした謄写版販売店があらわれてからです。

1918（大正 7）年、佐藤^{さとうきいち}齊一が神田神保町に謄写版販売店「佐藤兄弟商会」を開店しました。同商会は、堀井謄写堂などの従来の謄写版販売業者が官公庁などを主な顧客としていたのに対して、当初から個人を対象としました。佐藤は学生街、書店街であった神保町に集まるひとに謄写版の性能を示すため、印刷見本をショーウィンドーに貼りだしました。

このウィンドーで印刷物を見て謄写版を手がけるようになったという人は少なく

¹⁴ 出典：謄写印刷人名録「謄写印刷 Who's Who」

<http://www.showa-corp.jp/month/who/who.html#senda> 2013-12-18

¹⁵ 出典：謄写印刷人名録「謄写印刷 Who's Who」

<http://www.showa-corp.jp/month/who/who.html#senda> 2013-12-18

¹⁶ 参考：志村章子『ガリ版文化を歩く—謄写版の百年』pp.56-57

ありません。謄写技術の研究を始めていた人たちの心をつかみ、協力を得ることもできるようになりました。さらに、これをみて印刷の依頼がよせられるようになり、謄写版による印刷業を始めています。官公庁になどの需要に応えた事務用品としての謄写版とはちがった、高い表現力を求める個人向けの道具や材料の開発にも熱心でした。

ここで働いていた^{はばゆみのすけ}幅弓乃助は、1928（昭和3）年に独立して神田三崎町で「昭和謄写堂」（現在の株式会社ショーワ）を開きました。器材の開発、販売と印刷業にとどまらず、1933（昭和8）年に『昭和堂月報』を創刊して誌上で謄写秘術を紹介するほか、自社工房の公開、相談への細やかな対応などを通じ、謄写版に親しむ層を作っていました。

また、戦前・戦後を通じて技術書を発行し、講習会を主催して「美術謄写印刷」という呼び名にふさわしい、質の高い印刷の普及をめざしました。『昭和堂月報』は戦前に28号を、戦後復刊して100号を越えて発行され、洗練された謄写技術を普及し、謄写器材製造業者、謄写技術者、愛好者など謄写版にかかわる人達をつなぐ役割を果たしました。

大正期には東京以外の場所でも、謄写印刷業者が創業しました。大阪では、^{よしだへい}吉田兵七郎が1916（大正5）年に新世界で「三光堂」を開業したのがはじめです。1925（大正14）年に^{ごとうじろう}後藤治朗が大朝社を創業すると、そのかわら大日本謄写印刷普及会を設立し、小学校校長でもあった^{まんねんたかしげ}万年孝成を会長、^{おおつかのぶお}大塚信男を講師として各地で講習会を開きました。1930（昭和5）年には、彦根で^{いわねとよひで}岩根豊秀がサンライズスタジオ（現在のサンライズ出版株式会社）を開き、商業デザインの分野で活躍しました。

明治初期に堀井新治郎父子が謄写版を発明し、はじめは“官”の分野に広まった。そして大正から昭和にかけて、佐藤兄弟商会、昭和謄写堂をはじめとする謄写印刷業者によって個人層に普及し、国民的印刷機になった。国内では戦後の1960年代までが謄写版の黄金期であった。そこで次に、謄写版が活躍した時代のエピソードについてみていく。

第2節 山形県南陽市の謄写版印刷名人「鈴木藤吉」

私は山形県川西町出身であることから、山形県での謄写版の活躍にも触れたいと思う。戦前、現在の山形県南陽市宮内に謄写版印刷業を営んでいた鈴木藤吉について述べたい。

以下は、後藤さんから頂いた「山形謄写印刷資料館（山形ガリ版印刷資料館）ご・あ・ん・な・い」からの引用である。

山形県における代表的な謄写印刷名人として鈴木藤吉（冬吉、冬橘とも称した）（1908～1984）をあげなければなりません。鈴木藤吉は現南陽市宮内に生まれ、戦前に同地において「北陽謄写堂」を起し、さまざまな印刷物を製作しました。また同時に、宮川良の主宰する「日本謄写芸術院」（1931～1942）の主要同人として高度の美術印刷を遺しています。

現在は、山形県山形市の中央印刷株式会社の敷地内にある山形謄写印刷資料館に展示されている。戦前の山形県で、全国的にもみてもかなり高度な印刷物が作られ、これが奇跡的ともいふべき状態で保存されていたことは驚きである。

次男鈴木健二が保存していた 1903～40 年代（昭和 5 年～25 年頃）製作のチラシ類



結城酒店 甘味自慢白酒売出し



結城酒店 白酒売出し

第 3 節 学校教育と謄写版

明治 30 年代から昭和 30 年代まで、謄写版は学校の事務用印刷機として使用されていた。

¹⁷ 出典：山形謄写印刷資料館公式サイト「山形県 戦前チラシ：鈴木藤吉 1. 酒屋・醤油屋」
<https://chuo-printing.co.jp/gariban/suzuki01/> 2013-12-18

¹⁸ 出典：山形謄写印刷資料館公式サイト「山形県 戦前チラシ：鈴木藤吉 1. 酒屋・醤油屋」
<https://chuo-printing.co.jp/gariban/suzuki01/> 2013-12-18

ここでは、教育現場での謄写版の在り方についてみていく。

以下は、志村章子の『ガリ版ものがたり』の「わが名はガリ版文集—学校と教師と謄写印刷」(pp.144-145)からの引用である。

ガリ版世代の日本人にとって謄写版の思い出は、学校に直結するもののようである。〔中略〕

教室で配られる印刷物は、バラエティに富んでいた。試験問題のプリント、通信簿、父母会（それ以前は父兄会、現在は保護者会）、諸行事のお知らせ、学級通信、文集、遠足や修学旅行のしおり、学芸会の台本、譜面や地図などの教材、これらは生徒の側から見えるプリント類だが、報告書やデータ類、役所とのやりとりなどの実務文書の大半も謄写手刷器や輪転機によって作成された。〔中略〕

上記の引用文についてもう一度整理する。この頃は、現在使われているような印刷機がなかった。そのため、教師が一枚一枚謄写版で手刷りしていた。

ここまで、謄写版の誕生から最盛期までみてきた。その上でもう一度、謄写版の歴史を年表にして整理する。以下の表は、志村章子の『ガリ版ものがたり』(pp.263-270)と志村章子の『ガリ版文化を歩く—謄写版の百年』(pp.282-296)を参考に筆者が作成したものである。

時代	謄写版の歴史
1887 (明治20)	A・B・ディック社(米・シカゴ)、エジソン開発の特許を譲り受け「エジソンズミメオグラフ」と命名、発売する。
1893 (明治26)	堀井新治郎父子が、職を退き、簡易印刷機の発明に精進する。 3月、シカゴの万国博視察を兼ねて、アメリカに簡易印刷の情報収集、技術習得に向かう。
1894 (明治27)	1月、堀井新治郎父子(元紀、仁紀)は、謄写版を発明、発売する。 日清戦争 7月5日、堀井新治郎父子、東京・神田鍛冶町に謄写堂創業する。 同社、横浜の『ジャパンメール』に謄写版の広告を掲載する。
1895 (明治28)	3月12日、堀井謄写版、特許を取得する(第2499号)。 陸海軍、軍事通信に堀井の謄写版を採用され、多大な注文を受ける。堀井父子は全国を行脚する。
1918 (大正7)	佐藤齊一、北神田町に佐藤兄弟商会(器材と印刷)開店する。
1928 (昭和3)	幅弓之助、東京・神田山崎町に昭和謄写堂創業する。
1930 (昭和5)	鈴木藤吉、山形県宮内町(現在の南陽市宮内)に北陽謄写堂で謄写印刷を行う。 正確な創業の年は不明だが、1945(昭和20)頃まで謄写印刷を行っていたことは確かである。
1933 (昭和8)	「昭和堂月報」創刊する(昭和謄写堂 謄写版の最新技法を全国に紹介)。

第4章 謄写版の現代

第1節 今も生きつづける謄写版

前章までは、謄写版の誕生から最盛期までの歴史を説明してきた。次は、謄写版の現状について説明していく。最盛期が過ぎ去った後も、謄写版はひっそりと生きつづけている。植野比佐見の『謄写版の冒険—卓上印刷器からはじまったアート』（p.24）によれば、「1960年代以降、コピー機、ワードプロセッサ、パーソナルコンピューターが普及するにつれて、謄写版は使われなくなりました。〔中略〕1980年代後半になると、需要の乏しくなった謄写版印刷器、原紙などの生産が中止され、かつては街の文房具店においてあった資材も、手に入れることが難しくなってきました。それでも、謄写版に触れて孔版を深く知った人にとって、道具を手作りし、新たな資材を試し、手法を工夫して制作を展開させていくことは可能でした。」とある。

近年でも謄写版は表現の道具、仕事として活用されている。その例として2つの会社を挙げる。

1つ目は、東京都渋谷区東の魚竹ビル4階にあるアイルクリエイティブ社である。以下は、植野比佐見の『謄写版の冒険—卓上印刷器からはじまったアート』（p.24）からの引用である。

アイルクリエイティブ社では、2012（平成24）年まで天然酵母のパンを作る「大地の実」の店舗のために、値札、紙袋、ポスターをはじめ、カレンダーやパンフレットまでを、謄写版で製作・印刷をしていました。すぐに相手に手渡せる簡易印刷としての性質を活かし、日々人の手で焼いてすぐに手渡せるパンにふさわしい表現となっています。これらの仕事は、すでにロンドンやニューヨークなど海外のデザイン展で認められ、高い評価を受けています。



19

2010年のカレンダー「大地の実」

2つ目は、(有)不二プリント商会、以下は、志村章子の『ガリ版文化を歩く―謄写版の百年』(pp.9-11)からの引用である。なお、(有)不二プリント商会については、現在謄写版で台本を印刷しているかは不明である。しかし、平成20年までは「サザエさん」の台本が謄写版で印刷されていたことは確かである。

テレビの台本を今もガリ版でつくっている印刷屋さんがある。東京・荒川区東日暮里の尾竹橋通りにある(有)不二プリント商会で、看板には、「謄写・タイプ・オフセット印刷」の文字。演劇やラジオ、テレビ台本印刷を始めて三十五年になるという。近ごろはワープロ文字の台本も増えているようだが、放送現場では、ガリ版刷りの台本が求められている。「お仕事はどんどん入ってくるんですの」と玉田武子社長。NHK フジテレビ、日本テレビ、テレビ東京……と玉田さんは指を折った。事務所の机には、『サザエさん』や『クッキングパパ』など人気のアニメの表紙が見える。表紙は、先にオフセットで刷っておくのだ。

テレビ局がワープロよりガリ版台本を選ぶのには、いくつか理由あるようだ。まず出演者にガリ版台本が好まれていること。「うす暗いところでフィルムを見ながらの仕事なので、文字が大きく、慣れている手書き文字の方が読みやすいのだそうです」と玉田さん。そしてガリ版印刷は、小回りがきく。原稿の到着はギリギリになりがち、しかもコンテに鉛筆での直しが入ったりで、慣れが必要だ。納期まで一日、二日ということも珍しいことではない。

¹⁹ 出典：FEEL DESIGN「アナログであること」 <http://hanautaofmercie.blog.fc2.com/page-3.html>

大至急となれば一冊を何人かの筆耕者で手分けして、その日のうちに仕上げる。製版、印刷、製本（表紙のカラー印刷はすでに仕上がっている）、宅配便で納品という手順。部数は通常四、五十部ほどだが、出演者の多い番組で七十部くらいになる。用紙は、いつも決まっていて「孔版上質」。「ペラペラ、カサカサと本番中に音のするような紙は使えません」と言う。

現在、〔1995年当時〕筆耕者は七名。この道四十年の超ベテランから、“門前の小僧”でガリ切りを覚えたという玉田さんの長女や長男の妻など親族も。忙しいときは、もちろん玉田さんも鉄筆を持つ。こうした人員構成は、たしかに“無理がきく”。

玉田さんが謄写印刷店を始めたのは一九五〇年代の終わり。実妹の夫が放送局の制作部勤務で、そこの仕事をもらったのが最初だった。「その仕事を私にやらせてほしい」と頼みこんだ。実父の自死に遭って、長女の玉田さんが、家の“大黒柱”になる必要にせまられたのだ。もともと玉田さんは、高島屋の販売本部勤務時代からタイプ打ち、ガリ切りが大好きで、しかも名手だった。

このように、近年でも生業者もいるし、ガリ版の味わいを大切に「通信」づくりを続けている人や美術孔版画を極めようとする人もいる。ガリ版の利点を再発見して発展途上の国々に普及させようと動き出している人もいるのだ。

第2節では、謄写版の利点を活かして、海外で活動するボランティア団体を紹介する。

第2節 謄写版の魅力を活かして

前節で述べたように、現代の印刷機でも表現できない謄写版印刷の手書き手づくりの味わいも魅力の一つである。しかし、謄写版の最大の魅力は、電力が不要、持ち運びが便利、小回りがきくということだ。そして現在も、この魅力は発展途上国の国々から注目を浴びている。その実例として、タイ、カンボジア、ラオスなど発展途上国の教育、文化面での協力、援助を行っている NGO（非政府団体）の一つ、曹洞宗国際ボランティア会（SVA・海外での名称 JSRC）を挙げる。

以下は、志村章子の『ガリ版文化を歩く―謄写版の百年』（pp.230-237）からの引用である。

「タイの農村の小学校の先生が試験問題を一枚一枚手書きしていたんです。それも四十枚も五十枚も。謄写版が使えるんじゃないか、パッとひらめいたんです」
こう語るのは、曹洞宗国際ボランティア会（SVA・海外での名称 JSRC）事務局次長の吉川健治さんだ。SVA は、タイ、カンボジア、ラオスなど発展途上国の教育、文化面での協力、援助を行っている NGO（非政府団体）の一つで、その活動はすでに十五年になる。

同会の前身は、曹洞宗東南アジア難民救済会議（JSRC）。一九七九年（昭和五十四）難民援助に参加した人々により一九八一年（昭和五十六）に発足した。「カンボジア難民問題」の“解決後”に結成以来、教育、文化面の援助を行い、資金は市民による会費によって支えられている。

同会は、政治情勢の混乱から母国を離れ難民となった人々の施設、タイのカオイダン難民キャンプ（カンボジアからのり流入）やバンビナイ難民キャンプ（ラオスからの難民で、山岳少数民族モン族が 80%）で、印刷や教育にかかわる援助に携わってきたが、印刷の主流は輪転機だった。ハイテク機器は電力が必要だし、故障が起きると修理がむずかしい。部品を入手するなど、まず不可能というのでは、宝の持ちぐさである。そこで、謄写印刷の活用を考えたのは、以前に使用の経験を持つ SVA のスタッフたちだった。電力も不要、持ち運びも便利、小部数印刷にぴったりで小回りがきくのがガリ版だと。〔中略〕

難民キャンプでは“謄写版の先生”も務めなくてはならない SVA のスタッフたちは、畑定良氏（元国鉄職員でテンダー式謄写版を開発）に急遽“弟子入り”してにわかにな勉強、筆耕と印刷を学んだ。しかし日本からの中古品に頼るのには限界がある。やがてカオイダン、バンビナイ両キャンプで謄写版づくりが始まった。原料はすべて現地調達である。試作品は日本の謄写版をモデルにして、カオイダン難民キャンプでつくられた。チーク材などの堅牢な南方材を利用し、スクリーンは市場で買ってきたタイ産のシルクを張った。〔中略〕

カンボジア、ラオスの農村部には電気がひかれていないところが多い。たとえ電気が来ても、夜間二、三時間だけという状況下では、輪転機もコピー機も活躍のしようがない。ガリ版こそもっとも頼りになる印刷機なのだ。日本の謄写版は、難民キャンプの人々や農民、行政機関や教育関係者に TOSHABAN（トーサバンと聞こえる）の名で認知され、「謄写版によって難民、農民は自らの印刷手段を持つことが

できた。」(SVA 有馬実成事務局長) のである。〔中略〕

有馬さんは、「難民問題の本質は、人間の尊厳性と民族のアイデンティティをいかにして守るかにある」と言う。謄写版は識字教育にも必須の印刷機と位置づけている。「自身を表現できる力を持つことで、人権を自覚することができるようになるんです」〔中略〕

日本の謄写版と大きく異なるのは、キャンプの謄写版にはヤスリや鉄筆が不要であること。同地〔バンビナイ難民キャンプ(タイ北東部)〕ではロウ原紙(鉄筆用原紙)でなくボールペン原紙、タイプライター用の原紙(日本製)を使う。高温多湿の南の国では、原紙のロウが溶けだしてしまうこともある。日本でさえ、猛暑の夏には同様のことが起こることがある。ヤスリの現地調達がむずかしい、それにさびやすく管理しにくい、また、曲線で構成されるタイ、カンボジア、ラオスの文字はヤスリや鉄筆がなくとも書けるなどの理由からである。

バンビナイキャンプでの最初の謄写版印刷は、モン語の教科書づくり。キャンプ内の印刷班が十台ほどの謄写版を使用して、モン語によるモン族の民話を刷ったり、見事なモン族の刺繍の下絵づくりにも利用されるなど、謄写版は大活躍したのだ。

〔中略〕

日本では、“過去の印刷機”になった謄写版は、南の国々でトージャパンとして再生、“等身大の印刷機”へ熱い心を寄せる人々とともに、地球上をどんどん歩いていく。自らの印刷手段を必要とする人たちのいる場所へ。

上記の引用文に補足する。「テンダー式謄写版」について調べたが詳しいことは不明である。因みに、テンダーとは「石炭・水を積載する車両。」(広辞苑 第六版)のことである。筆者の推測では、テンダー機関車に搭載されていた謄写版のことではないと思われる。

また、バンビナイ難民キャンプで実際に使用された日本製のボールペン原紙、タイプライター原紙に関しては、どこのメーカーのものかは不明である。しかし、大東化工株式会社の公式サイト「会社概要」²⁰によれば、現在もボールペン原紙、タイプライター原紙を生産している。このように、海外に向けて今も原紙を生産している会社が存在する。

²⁰ 参考：大東化工株式会社の公式サイト「会社概要」<http://www.daito-chemical.com/index.html>

おわりに

本論文では、謄写版印刷について論じてきた。私がこのテーマを選択した当初は、実際に謄写版を見たことも使ったこともなかった。

そこで、本論文でも紹介した、中央印刷株式会社内の山形謄写印刷資料館に足を運んだ。資料館で目にした、貴重な謄写版器材やたくさんの作品に私は感激した。私が謄写版について研究する前は、文章を刷ることだけに利用するものだと思っていた。実際に資料館へ行ってみると、謄写版で刷られた、世界地図、多色刷りのポスターやチラシなど、まさに芸術作品が数多く展示されていた。多色刷りについては本論文では触れていないが、多色刷りとは、「1色刷・2色刷に対して、3色以上の印刷物。」（広辞苑 第六版）のことである。謄写版では、1枚1枚手作業で1色ずつ重ねて印刷していく。非常に根気のいる作業である。多色刷りに関わらず謄写版で印刷することは、今のハイテクな印刷機を使って印刷する現代人には想像もできない面倒な作業かもしれない。しかし、私は初めて謄写版で刷られた印刷物を見て、現代の印刷機では表現できない手書きの美しさ、温かみを感じた。初めて謄写版で刷られた印刷物を見たときは、全て手書きであることを疑ったほど綺麗に刷られていた。

このような素晴らしい印刷物を刷れる謄写版を発明し開発、販売した堀井新治郎父子の努力を称賛したい。謄写版の誕生により印刷が誰でも簡単にできるようになった。当時の人々にとって印刷がさぞかし便利になったことは言うまでもないだろう。まさに画期的な発明であったことが、謄写版の研究により理解できた。

謄写版器材については、第2章で紹介したように様々な道具を使う。原紙にも原稿用紙のような罫や五線譜の原紙など用途別に種類がたくさんある。私が謄写版器材で1番驚いたことは、鉄筆の種類之多さである。丸先のような文字を書く鉄筆しかないと考えていたが、ヘラ型のように絵を塗りつぶす際に使う変わった形の鉄筆がある。謄写版印刷でより美しく仕上げようとする先人の知恵と工夫が詰まっていた。鉄筆だけでなく、ローラーやスクリーンなど全ての器材は、どう作業を合理的に進め、美しい印刷物を作るかの工夫から生み出されたものであろう。

謄写版の最盛期には、当時、山形県で謄写版印刷を行っていた鈴木藤吉のように、全国に多くの謄写版印刷業者がいた。また、学校でも教師やその周辺の地域の人々は謄写版を利用していた。つまり、当時は全国に謄写版で刷られた印刷物が多く存在したということである。いかに日本国民に謄写版が浸透していたことが分かった。

そして、謄写版が身近から姿を消した現在について研究して、私は胸を打つ発見があった。それは今も謄写版を表現の道具、仕事として使っている人がいたということである。私がこの研究を始めた頃は、謄写版は過去の印刷機だと思っていたが、間違いであった。現在も、電気が通じない発展途上国では謄写版が現役で活躍している。謄写版の利便性である電力不要で持ち運びが簡単、小回りが効くということが何よりも要因であると思われる。明治時代に堀井新治郎父子により発明された謄写版が今も海外で使われていることは、謄写版を使ったことがある日本人にとって、喜ばしいことではないだろうか。

現在の本やチラシ、ポスターや学校で配られるプリントなど、ほとんど全ての物がパソコンで打ち込まれた字である。印刷にしても手を汚さず簡単にそして素早く印刷できる。まったく便利なものである。だが、私のような謄写版を使ったことのない人にとっては、全て手作業で1枚1枚心を込めて印刷する謄写版は逆に新しく感じられるのではないだろうか。

最後に、この論文を読んでもくれる方が、謄写版を使ったことがある人、ない人でも、謄写版印刷について理解することができ、魅力を感じてくれればいいと私は願う。

後藤さんから頂いた以外の資料

参考文献

- ・志村章子『ガリ版文化を歩く―謄写版の百年』新宿書房、1995年
- ・志村章子『ガリ版ものがたり』大修館書店、2013年
- ・杉田寿夫『印刷・製版業界』教育社、1982年
- ・寒川道夫『ガリ版先生』、1956年（監修：宮原誠一・国分一太郎『教育実践記録選集5』）
新評論、2002年
- ・澤井余志郎『ガリ切りの記―生活記録運動と四日市公害』影書房、2012年

参考サイト

- ・科学技術史コレクション「謄写版（簡易印刷機）」
<http://homepage2.nifty.com/nakagen29/40.htm> 2013-7-24
- ・近江歴史回廊倶楽部「ガリ版の発明者堀井新治郎父子」
<http://ohmikairou.org/col32.html> 2013-12-27
- ・horii「発明家 堀井新治郎」、
<http://members.e-omi.ne.jp/okamoto/yumepuran/gariban/sinji/horii.htm>
2013-12-17

- ・クイン・エマニュエル法律事務所「ミニ・エジソン・ミュージアム」
http://www.quinnjapan.com/imini_edison_museum/index.html 2013-12-27
- ・山形県印刷工業組合公式サイト「業界トピックス：山形謄写印刷資料館」
<http://yamagata-pia.jp/topics/mimeograph/> 2013-12-18
- ・楽天ブログ「チューさんの今昔ばなし：謄写版・・・昔の手書きプリンター（2）」
<http://plaza.rakuten.co.jp/chusan55/diary/201107200000/> 2013-12-18
- ・いいものみつけた「謄写版の鉄筆原紙用修正液」
<http://kosamabetuka.cocolog-nifty.com/iimono/2008/11/post-2812.html> 2013-12-18
- ・謄写印刷人名録「謄写印刷 Who's Who」
<http://www.showa-corp.jp/month/who/who.html> 2013-12-18
- ・山形謄写印刷資料館公式サイト「山形県 戦前チラシ：鈴木藤吉 1. 酒屋・醤油屋」
<https://chuo-printing.co.jp/gariban/suzuki01/> 2013-12-18
- ・FEEL DESIGN「アナログであること」
<http://hanautaofmercier.blog.fc2.com/page-3.html> 2013-12-27
- ・大東化工株式会社の公式サイト「会社概要」
<http://www.daito-chemical.com/index.html> 2013-12-27

後藤さんから頂いた資料

- ・編集：植野比佐見『謄写版の冒険一卓上印刷器からはじまったアート』パンフレット
和歌山県立近代美術館、2013年
- ・山形謄写印刷資料館（山形ガリ版印刷資料館）ご・あ・ん・な・い
（カラー刷り写真掲載）
- ・山形謄写印刷資料館（山形ガリ版印刷資料館）ご・あ・ん・な・い
（説明文等）
- ・後藤卓也『ガリ版資料館“奮戦記”①～⑤』中央印刷株式会社
月刊「プリテックステージ」1998年4月号～8月号、2月号
- ・執筆者：小針美夫、志村章子、後藤卓也、佐川京子『謄写印刷の天才・神様と称された
佐川義高は里美村生まれだった 草間京平（佐川義高）伝』里美村教育委員会、1999
年
- ・鈴木冬橘『美しい孔版印刷 補訂第二版』タカノ印刷 1963年
- ・「堀井謄写堂本店 商業目録第六十三号」大正4年（1915年）（コピー14枚）
- ・「宮内町新町 加嶋屋時計店一開店一周年謝恩売出し」北陽謄写印刷（チラシのコピー）
- ・「山形県小松町 山岸洋品店一高級洋品・雑貨」（チラシのコピー）

謝辞

本論文を作成するにあたり、指導教員の三原容子先生から丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。また、日頃から三原先生のもとで、論議を通じて多くの知識を頂いたゼミの皆様にも心より感謝いたします。そして、中央印刷株式会社内の山形謄写印刷資料館館長後藤卓也さんにはご多忙中にもかかわらず大変お世話になりました。謄写版の器材や作品をたくさん拝見させて頂き、また貴重な資料を頂けたことに御礼申し上げます。本当にありがとうございました。